

岡山における「地方改良運動」

-社会事業家の「理想主義」との結びつき-

マスカットユニオン 片山貴夫(4785)

キーワード：地方改良運動、石井十次、三代教育

1. 研究目的

「地方改良運動」は内務省主導である。しかし、日露戦争前後から存在してきた、民間の社会事業家などの「理想主義」的要素をも踏まえて構想、実施されたことについて考察する。

2. 研究の視点および方法

「地方改良運動」に関係した、民間の社会事業家の言説、地方改良「講話」の言説、併せて批判的な言説についても検討を試みる。また、「地方改良運動」の作りだした結果について、地域の実態に即して考察する。

3. 倫理的配慮

- 1) 社会事業施設に保護されていた人間の実名については原則として苗字のみを表記する。
- 2) 社会事業施設に保護されていた人間の人物像については誹謗中傷になりうる表現を可能な限り避ける。
- 3) 事実についての判断と、価値についての判断とは峻別する。
- 4) 関係者の遺族から異論が出た場合は、それを併記する。
- 5) 現在において差別的表現となり得る表現は、原史料の引用の場合を除いて使用しない。

4. 研究結果

岡山県内において「地方改良」運動に関係する言説の史料は留岡幸助『地方改良講演速記』(1913)などが存在する。

井上友一が「地方改良と宗教」(1913)において岡山孤児院の「三代教育」論について言及している(石井十次は、教育によって「有為の人物を輩出せしめ」(『日誌』1891年10月7日)る期待を抱いていたが、1910年には「教育の力は決して全能ぢやなくて僅か二分位の力しかない」(「岡山孤児院教育談」、『慈善』第3編第1号)という意見を公にし、教育に対する悲観主義の立場に移行する。施設収容の生む弊害が、石井を閉ざされたユートピアちやうすはると言うべき茶臼原開拓地に退却させたといえることができる)。石井は郷里の高鍋の自治体合併にも関わっていた。

「地方改良運動」の担い手として期待されたのは、主に小学校教師、宗教家、「名望家」

であったが、日露戦争前後から誕生していた社会事業関係者の事業および「理想主義」的要素もある程度踏まえていたものと思われる。井上は、単に日本の農村社会だけでなく、欧州においてキリスト教会と結びついていた「地方自治」のモデルを踏まえていたので「宗教家」に「救済事業」の担い手としての役割を期待した。

また、先行研究（郡司美枝『理想の村を求めて』）で言及されているように、「社会主義者」であった者が「地方改良」のイデオログとなった場合もあった（石井と「社会主義者」の間には〔反戦論以外では〕基本的な価値観がそれほど大きく異なっていたとは思えないが、政治的変革の道と社会事業との間の相互交通が遮断される）。

和気神社の創建に見られるように部落差別への対応として行われた場合もあったようである（岩間一雄編『三好伊平次の研究』）。

5. 考察

地方改良運動の機能した側面には、通俗道德の振興から国民統合の再強化に至るまで様々な要素があった。石井十次の思想性との間にはある程度の共通性があった。

農村社会の再建を、日本全体の再建に結びつけようとする方向性には、南方熊楠の『神社合祀に関する意見』による批判が当時からあったように、目指していたはずの方向性とは反対に、「伝統」および「醇風美俗」の解体を推し進める結果も伴ったといえる（「戦後」の「市町村合併」と共通する弊害。ゲマインシャフトとしての自然村を、資本主義経済の論理に適合させようとしたこと、鼓吹したイデオログ自身が村落にとっては「部外者」であり、「模範」として「顕彰」された住民とは方向性が異なっていたであろうことなど）。

それにも関わらず、民間の社会事業家の持っていたある種の「理想主義」が合流して成立したものであった。